

無音の弾丸

クレイグ・ケネディの理論

「どの大学にも犯罪科学という学問がないのはなぜか。それが私にはずっと不思議でならなかったんだ」

クレイグ・ケネディは夕刊紙を置いて、多くの煙草を自分のパイプに詰めた。大学時代に相部屋で暮らしたぼくたちは、金欠も含めて何でも共有してきた。クレイグが化学の教授、ぼくが《スター》紙の記者となった今も共同生活は続いている。経済的に楽になったこともあり、ぼくたちは大学からさほど遠くないハイツでこざれいな独身者用のアパートを見つけた。

「犯罪科学の教授がどうして必要なんだ、クレイグ？」ぼくは椅子の背にもたれかかりながら、異を唱えた。「ぼくは警察本部で番記者をやったことがある。だがなクレイグ、あそこは大学の先生が来るところじゃない。犯罪はしよせん犯罪だ。犯罪捜査は生え抜きの刑事に任せておけばいい。大学の教授が社会学だの何だのを論じるのは構わない。だが犯罪捜査では足手まといになるだけだ」

「それはどうかかな」とケネディが反論した。その目鼻立ちの整った顔から、何やら重要な話を切りだそうとしている気配が伝わってきた。「犯罪捜査には科学が役に立つはずだ。その点においては、ヨーロッパはずっと先行している。私はバリの犯罪捜査の専門家を十人ほど知っているが、彼らに比べれば、私たちはまだまだ遅れている」

「だとしても、大学の教授がどこで役に立つんだ？」

「いいかい、ウォルター」ケネディは熱弁を振るいはじめた。「行動力のある実践的な教授が現れて

から、まだほんの十年ほどだ。お上品な学者はもう時代遅れだ。今や労働争議で仲裁役を務めるのも、通貨改革を行うのも、関税委員会の先頭に立つのも、農地や森林を保護するのも大学教授という時代。あらゆる分野に教授がいるんだ——だったら、犯罪の教授がいてもおかしくはないだろう？」

それでもぼくが疑わしそくに首を振ると、彼は慌てて要点に移った。「大学は、もはや純粹な学問の修養の場というかつての理想からかけ離れてしまった。ほとんどの大学は生命の厳然たる事実を解き明かそうと取り組みはじめた——一つの分野を除いて。犯罪の扱いは古くさいままだ。統計を調べ、動機を究明し、犯罪を防止するために理論づけしようとする。だが、科学を駆使して容赦なく犯罪者を特定するかという——いやはや。まったく進歩していない」

「きみはきつとこの実に興味深いテーマで論文を書くに違いない。ま、せいぜい励んでくれよ」

「いいや、こっちはいたって真剣だよ」と彼が言い返した。どうやらぼくの考えを改めようと決意をかためているようだ。「言った通りだよ。私は科学を駆使して犯罪を究明するつもりだ。科学物質の存在を突き止めたり、未知の病原菌を追跡したりするのと同じようにね。だが成功を収める前に、ウォルター・ジェイムソン、きみを助手に任命するつもりだ。この仕事にはきみが必要なんだ」

「ぼくに何をしろと？」

「そうだな。まずは新聞業界で言うところの、特ダネだかネタだかを取ってきてほしい」

ぼくは作り笑いを浮かべておいた。新聞記者は何か起きるまでは動じないものだ——だがひとつは何か起きようものなら、一斉に駆け出してそれを追究する。

数日後、ぼくたちは再びこの話題について議論することとなった。

無音の弾丸

「小説では、探偵は必ずといっていいほど大きな間違いをする」とケネデイが言った。犯罪と科学について話し合った後のある晩のことだ。「どの探偵も決まって警察を敵にまわす。だが、そんなことは現実ではあり得ない——自分の首を絞めるようなものだ」

「確かに」ほくはうなずいて新聞から目を上げた。ウォール街の大手ブローカー、カー・パーカーアンド・カンパニーの倒産と、カー・パーカーの奇妙な自殺に関する記事を読んでいるところだった。「あり得ないね。警察が新聞社を敵にまわせないと同じぐらいにね。スコットランドヤードも、クリッペンズの殺人事件でそれに気づいたところさ」

「ジェイムソン。私が思うに、犯罪科学の教授は警察に協力するべきだ。対抗してはいけない。警察は邪魔にはならない。しかも、なくてはならない存在だ。今や、成功の秘訣は組織力にあると言っても過言ではない。犯罪科学の教授は、工学部の教授と同じように、顧問技師みたいになればいいんだ。たとえば、きみが読んでいるそのウォール街の事件。組織と科学が手を組めば、その事件の真相を究明できるだろう」

きみの意見を理解できるほど警察が賢ければいいがなと、ほくは皮肉った。

「賢い人もいるさ。昨日、西部にある都市の警察署長が〈ブライス殺し〉の件で私のところに捜査官を寄こしてきたんだ——あの事件のことは知ってるだろう？」

その事件のことは知っていた。市内に住む裕福な銀行員が、ゴルフクラブへと続く道路で殺され

ていた事件だ。動機も犯人も、誰にも思い当たるふしはなかった。手がかりは結局何の役にも立たず、容疑者の数も多すぎて特定するどころではなく、迷宮入りかと思われた。

「捜査官は血痕がべったりついたハンカチの切れ端を持ってきたんだ」ケネディは続けた。「しかもそれは殺された銀行員のものではないという。つまり、とっくみあいどきに犯人がけがをしたということだ。だが、手がかりとしては何の役にも立たなかった。で、私はどうしたと思う？」

「捜査官から話を聞いた後、犯人はゴルフ場で働いているシチリア人か、ゴルフクラブの黒人ウエイターではないかと思ったんだ。詳しい話を省くと、血痕を検査することにしたんだ。きみは知らないかもしれないが、カーネギー研究所が人間の血液と動物の血液を短時間で詳しく調べられる検査方法を開発したんだ。彼らはその検査方法を基に動物界を再分類し、進化論に驚くべき事実を付け加えたんだ。さて、きみにとっては退屈な話だろうから詳細は話さないが、おもしろい発表が一つあった。ある民族の血液が、猿とチンパンジーのある種族の血液と良く似た反応を示したんだ。他方で、別の民族の血液がゴリラの血液と同じような反応を示したという。もちろんそれ以外のことも発表されたが、とりあえずここでは関係ない」

「私はその検査を試してみた。ハンカチについていた血痕はゴリラの血液と同じ反応を示した。もちろんゴリラが犯人であるはずがない——「モルグ街の殺人」とは違うからね。ということは、犯人は黒人のウエイターだ」

「でも」ぼくは話をさえぎった。「そもそもあの黒人には完璧なアリバイがあつて——」

「ところが、夕食のときにこんな電報が届いたんだよ。『おめでとう。あなたの電報をジャクソンに突きつけたら、白状したよ』」

「すごいな、クレイグ。脱帽だよ。次はカー・パーカーのこの事件を解決するんじゃないか」

「依頼が来たらね」彼は素っ気なく言った。

その晩は何かも言わずに、セントラル・ストリートの薄汚いエリアで異彩を放つ警察署の新しい建物へと向かった。慌ただしそうな雰囲気だったが、警察本部にはすんなりと入れた。多くの提案を聞いた本部のバーニー・オコーナー警視は、口の端にくわえていた葉巻をそろそろと口の反対側へと移動させた。

「ジェイムソン」警視がようやく口を開いた。「その大学教授は本当に頼りになるのか？」

ケネディに対する多くの率直な意見を話した。それからプライスの殺人事件の話をして、電報のコピーを見せた。それが決め手となった。

「今夜その教授を連れてきてくれないか？」

ぼくは電話をかけ、研究室にいたクレイグにつながった。クレイグは一時間後には警察署にいた。

「ケネディ教授。実に不可解なんですよ、このカー・パーカー事件というのは」警視は早速事件の話を持ち出した。「このプロローグはメキシコ産のゴムに目をつけたんです。申し分のない投資先に見えたからです——ラバートラスト社と同じ地域にプランテーションがありますからね。彼はまた、沿岸航路にも参入していました。彼の同僚は、アメリカからメキシコまでを結ぶ鉄道計画に大きく関わっています。汽船と鉄道はゴムと石油と銅などといった資源の輸送に使おうというのでしよう。彼らは自分たちの管理下にある二社の信託会社からお金を借りて、ここニューヨークで株式を買いあさっていました。すでにご存じかもしれませんが、おいしい戦略です。さらに、〈システム〉と呼ばれる資本家集団と競合関係にあったこの記事も既にお読みかもしれませんが。」

そこへ株価が暴落しました。かの信託会社が危ないとの噂がまたたく間に広まり、両社共に取り付け騒ぎが起きました。(システム)は市場を下支えすると大々的に宣言しました。しかし、それでも取り付け騒ぎは収まりません。今日の事件を受けて、さらに解約が殺到するのか、信託会社が持ちこたえるのかは誰にもわかりません。事件が起きたとき、市場が既に閉まっていたのは不幸中の幸いでした。

事件当時、カー・パーカーは、かの戦略の協力者たちと一緒にいました。取締役会室で重要な会議を開いていたのです。パーカーは突然立ち上がると、窓に向かってよろよろ歩いて倒れました。医師が駆けつけた頃には、すでに息を失っていませんでした。騒ぎにならないよう、箝口令が敷かれ、彼は自殺を図ったと公表されました。しかし新聞は自殺説を疑っています。我々もです。うちの検視官は検視審問までは黙っているつもりです。というのよね、ケネディ教授、現場に最初に到着した部下が、カー・パーカーが殺された証拠を発見したからです。

で、ここから信じられない話になるのです。当時、両隣のオフィスに続くドアは両方とも開いていました。どちらのオフィスにも人が大勢いました。いつもと同じようにタイプライターを打つ音、相受信機がデータを印字する音、会話のざわめきが聞こえていました。事件の一部始終を目撃した人はいくらでもいるのですが、銃声を聞いた人も、硝煙を見た人も、物音を聞いた人もいません。武器も見つかりませんでした。しかし、ここに三十二口径の銃弾があります。今日の午後、死因を調査した警察医がパーカーの首のなかからこれを取り出して警察に提出したんです」

ケネディは弾丸を手にすると、しばらくの間指で注意深く角度を変えて観察した。男の首の骨に当たったのか、弾丸の一部がつぶれている。その反対側は無傷で滑らかなままだ。彼は必需品である拡

大鏡を使って弾丸をくまなく調べた。ほくはケネディの顔をまじまじと見た。彼が恐ろしく集中しているのが見て取れる。

「これは実に興味深い」ケネディは何度も弾丸の向きを変えながら、ひとりごとを言った。「この弾丸はどこに当たったんでしたっけ？」

「首の肉厚なところです。耳の下のやや後方で、襟元のすぐ上です。出血は多くはありません。おそらく脳底に当たったのでしょう」

「襟や髪には当たらなかったんですか？」

「ええ」

「警視、犯人はきつと見つかりますよ。実験室でこの弾丸を調べれば証拠が出るはずです。そこから犯行がつかめるでしょう」

「いかにも小説みたいな話ですなあ」警視は疑わしげに首を左右に振って、語尾を伸ばした。

「かもしれない」ケネディがニヤリとした。「さて、警察にやっていたきたい仕事がたくさんあります。私は犯人の手がかりを見つけるだけです、警察には総力をあげてサポートしていただかないと。では、警視。パーカーのオフィスへ行って、現場を案内していただけますか？ きつと何かが見つかるはずですよ」

「もちろんですよ」と警視が答え、五分後には警察車両に乗って現場へと向かった。

事件現場のオフィスでは本部から派遣された一人の警官が見張りをしていた。別のオフィスではパーカーの秘書と数人のアシスタントが感情を抑えながら黙々と仕事をしている。事件が起きたその晩もウォール街の各社では人々が働いていたが、このオフィスはまさに仕事に追われる状況にあった。

〔著者〕

アーサー・B・リーヴ

本名アーサー・ベンジャミン・リーヴ。1880年、ニューヨーク州ロングアイランド、パッチョーグ生まれ。プリンストン大学卒。1910年、シリーズ探偵クレイグ・ケネディ教授が活躍する短編を発表。12年に短編集「無音の弾丸」を刊行。この作品が『クイーン』の定員第49席に選出され、探偵小説史に名を残す。36年死去。

〔訳者〕

福井久美子（ふくい・くみこ）

英グラスゴー大学大学院英文学専攻修士課程修了。英会話講師、社内翻訳者を経て、現在はフリーランス翻訳者。主な訳書に『ハーバードの“正しい”疑問を持つ技術』（CCCメディアハウス）、『パリジェンヌ流 デュカン・ダイエット』（講談社）、『最強スパイの仕事術』（ディスカヴァー・トゥエンティワン）、『墓地の謎を追え』（論創社）など。

む おん だんが ん  
無音の弾丸

——論創海外ミステリ 201

---

2017年12月20日 初版第1刷印刷

2017年12月30日 初版第1刷発行

著者 アーサー・B・リーヴ

訳者 福井久美子

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

---

ISBN978-4-8460-1646-3

落丁・乱丁本はお取り替えいたします